学び合う集団づくりを通して生きる力を育てる学級経営

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 41
Ⅱ　研究の仮説 …… 41
Ⅲ　研究の全体構造図 …… 42
Ⅳ　研究内容 …… 43
　1　個性を尊重する学級経営 …… 43
　　(1)　学級経営の機能と内容 …… 43
　　(2)　子供の個性を捉えた学級経営 …… 43
　2　「やる気」を育てる学級経営 …… 43
　　(1)　「やる気」と「動機」 …… 43
　　(2)　「やる気」の発達 …… 44
　　(3)　「やる気」と自己実現 …… 45
　3　学び合う集団づくりと学級経営 …… 45
　　(1)　自ら学ぶ意欲について …… 45
　　(2)　学び合う集団づくりのための学級経営 …… 45
　4　実態調査 …… 46
　　(1)　ＳＭＴ検査より …… 46
　　(2)　「聞く・話す」に関するアンケートより …… 47
　5　学び合う態度の確立を目指す学級経営 …… 50
　　(1)　年間の見通し …… 50
　　(2)　年間指導のポイント …… 50
Ⅴ　実　践　1 …… 52
　1　題材名 …… 52
　2　題材設定の理由 …… 52
　3　本時の目標 …… 52
　4　授業仮説 …… 52
　5　本時の展開 …… 53
　実　践　2　「ディベートゲーム」 …… 53
　1　学び合う学級経営における「ディベート」 …… 53
　2　論題と定義 …… 54
　3　児童の実態 …… 54
　4　活動計画 …… 55
　5　本時の活動 …… 56
　　(1)　本時の目標 …… 56
　　(2)　授業仮説 …… 56
　　(3)　本時の展開 …… 56
　　(4)　評価 …… 59
Ⅵ　研究の成果と今後の課題 …… 59
　1　実践における子供の姿から見た仮説の検証 …… 59
　2　ＳＭＴ検査結果から見た仮説の検証 …… 60

宜野湾市立　志真志小学校
新　垣　幸　枝

＜学級経営＞

学び合う集団作りを通して生きる力を育てる学級経営

宜野湾市立志真志小学校　教諭　新　垣　幸　枝

I　テーマ設定の理由

子供は、もともと勉強したいという気持ちを強く持っている存在である。新しいことを知りたい、勉強して何か身につけたい、勉強した成果をみんなから認められたいという気持ちを持っている。しかし、授業に対して距離を置いたり、虚ろな目をしていたり、お喋りに夢中になり、無関心になることが現実としてある。それは、学ぶ価値や目的、学び方等を発達段階にあわせて理解し、自分のこととして受け止め主体的に関わっていないからである。

生涯学習社会を見据えると「自己教育力」や「生きる力」等の基本的な資質の育成が、学校教育に課せられている。「生きる力」の育成を基本として知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から、子供たちが自ら学び、自ら考える教育への転換を目指すことである。そして、知・徳・体のバランスのとれた教育を展開し豊かな人間性と逞しい体を育むことである。 そのためには、学ぶ価値、学習の意義や必要性等を子供たちに気づかせる必要がある。もう一つは、子供の視点に立った教育活動を展開することである。一人一人の個性を生かし、主体的に関わらせる教育である。

自ら学ぼうという意欲は、学ぶことによって何か新しい知識を獲得したり、何か新しいことができるようになったという喜びから発生し、強まるものである。学ぶことによって知識・理解が広まり深まることが、子供自身にも自覚できるような効果的な学び方を、子供に教えることが教師本来の役目（最も重要な任務）である。それは、共に学び続ける教師の姿勢も大事な条件であると考える。 これまでの私の教育実践は、子供一人一人の個性、能力、適性を自分なりに把握して、それを教育のスタート台としてきた。また、自分の生き方を子供たちに率直に語る教師像を目指してきた。つまり、教師と子供とが相互に学び合うことを教育の出発点としてきた。しかし、国際化、情報化、科学技術の発展がいっそう進歩し、「変化の激しい時代」の社会にあって、多様化した子供たちの個性や能力、適性等をきちんと把握し、適切な教育を実践し学び合う集団にすることが複雑かつ困難になってきた。「共に学ぶ」ということは授業においても、学習者としての子供の立場に立ってスタートすることである。

そこで、個性を尊重しながら、授業の中で自分の存在が満たされる達成体験の場を、一人一人が多く作れるようにすると同時に、相互に学び合える学級作りを目指していきたい。つまり、知識の習得も他者と交換し合い、確かめ合い、共感し合うことによって、より本物の知力としての内在化を図りたい。学びの共同体としての学級集団を、学習主体としての子供たちを真に人間的に自立させる基盤としていきたい。

II　研究仮説

学習指導の場において、子供に学ぶ価値や喜びを見つけさせ、学習の達成体験をもたせれば、学び合う集団となり「生きる力」が育成できるであろう。そのための学級経営を次のようにする。

◯教師による「生き方の語り」を、全教育活動の中で適宜に組み、子供の発達課題に見合わせて、年間通じて展開していく。

◯学習指導の中の「学び合う過程」を重視し、練り合い認め合う場で、学習の達成感、成就感を数多くもたせる。

Ⅲ　研究の全体構造図

新しい学力観

- 自ら学ぶ意欲
- 主体的対応能力
- 基礎・基本の徹底
- 個性を生かす

→ 自己教育力

○自ら学び（自己学習力）
○生きる力（自己生活力）

学校教育目標

●豊かな人間性を培い、心身共に健康でたくましい子供の育成

○よく考え進んで学ぶ子
- 自己教育力を身につけ社会の変化に主体的に対応できる子の育成

○仲良く助け合う子
- 心豊かで社会性に富む子の育成

○明るく強い子
- 厳しさに打ち勝つたくましい体力と気力の充実した子の育成

これまで

- 知識技能重視
- 画一的、一斉指導
- 結果重視
- 教師主導（教える）

教師側の上手な教え方

→

これから

- 意欲態度重視
- 個性化・個別化
- 追求の過程重視
- 自ら学ぶ授業
- 体験重視

子供の側に立つ

学　年　目　標

○最後までやりぬく子
○いろいろな考えのできる子
○助け合ってのびる子

総合的な学習の時間の目標

1　自らの興味・関心に基づいて課題を見つけ、課題解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む能力や態度の育成
2　情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表、討論の仕方などの学び方やものの見方の育成
3　知識や技能の総合的な用い方の育成

※教課審「中間まとめ」より

子供の願い　担任の願い

○仲良く楽しい学級
○何でも言い合える学級
○思いやりのある学級
○けじめのある学級
○生き生きしている学級
○人の意見を素直に聞く学級

→

学　級　目　標

○明るくけじめのある子
○人の話をしっかり聞き、よく考える子
○みんな仲良く助け合う子

↓↓

研究テーマ

学び合う集団作りを通して生きる力を育てる学級経営

↓↓

研究仮説

学習指導の場において、子供に学ぶ価値や喜びを見つけさせ、学習の達成感を持たせれば学び合う集団となり、「生きる力」が育成できるであろう。

↓↓

研究内容

文献による理論研究
- 個性のとらえ方
- 「やる気」と学級経営
- 「聞く・話す」と学ぶ

実態調査
- ＳＭＴ検査
- 「聞く・話す」アンケート

「学び合う」学級経営の実践研究
- 学級経営年間指導計画
- 語りの題材・内容収集、実演
- デイベート授業

Ⅳ　研究内容

1　個性を尊重する学級経営

(1)　学級経営の機能と内容

学級は同地域、同年齢の子供で編成された集団の一つであり、子供や保護者の意志原則として勘案されていない（子供は学級ひいては担任を選ぶことができない）こと等が、学級の特質である。さらに、学級は、子供の学校での生活や学習の最も基本的な場である。

学級経営の機能の主なものを挙げると、

① 学校の経営方針のもとで、担任が学級を単位として行う教育指導と、そのための条件整備のすべての営みを含めたはたらきであること。
② 子供一人一人の学校生活の安定を図り、個性を伸長し社会性を育成すること。

となる。また、学級経営の内容は、次のようにまとめられる。

① メンバーである子供たちを学級集団としてまとめていくこと。（帰属意識や連帯感の育成、学級作り）
② 担任としての学級の子供たち学習指導や生活指導を行うこと。
③ 学級の物的な環境を構成したり、整備したりすること。（教室経営）
④ 学級の子供たちを理解し指導していくための多様な情報を収集・活用すること。
⑤ 学級の子供たちの家庭・保護者との連携協力を図る。

以上から、個性を生かしながら集団として教育していくことが、学級経営の基本であるといえる。

(2)　子供の個性を捉えた学級経営

子供にとって、これまでの学習や生活で発揮してきた「良さ」や、これからいっそう伸ばしていくであろう多様な「可能性」が個性である。単に秀でたところがあると言うだけでなく、人間総体としてよりよい存在に高まりながら、可能性が伸びてほしいという願いがふまえられている。

「あるがままの個を尊重」しながら可能なところから実践していくことが「個を生かす教育」の第一歩である。生かされ伸ばされた個性・能力は、単に何かができるようになることではなく、人間性を豊かにするものとしてあることが望まれるし、まわりの人々にも受け入れられたり洗練されたりする望ましい関係になければならない。「集団の中の個を尊重する」という視点は、個を生かす上で欠かすことができない。

「個の存在」を大切にすることと「個の特性」を生かすことの調和は、実践的には容易なことではない。こうした相反するような二面のいずれか一方に偏る教育は、「個を生かす教育」とはなりえず総体としての個（人間像）をとらえようとするとき、この二つの調和が欠かせない。

したがって、個性豊かな子供像を次のようにとらえて、学級経営にあたっていく。

① 知と情意の調和で基礎・基本を習得し、個性・能力を発揮する力をつけながら
② 他を受容し自己を表出する力を高め、
③ **主体的にたくましく生きていく。**

2　「やる気」を育てる学級経営

(1)　「やる気」と「動機」

学級経営をする際、子供たちをいかに「やる気」にさせるかと心砕き、「やる気」を出させるための授業改善や人間関係づくり等とあれこれ方策を考える。

心理学の研究では「 やる気」は「達成動機」として扱われる。達成の定義は、『難しいことを成し遂げること。自然物・人間・思想に精通しそれらを処理し組織化すること。それをできるだけ速やかにできるだけ独力でやること。障害を克服し高い標準に達すること。自己を超克すること。他人と競走し他人をしのぐこと。才能をうまく使って自尊心を高めること。』とある。

人や動物の生理的あるいは心理的な状態が何らかの意味で不均衡になったとき、あるいはもっと大きな喜びや刺激を求めるときの生活体の内的状態にあると、人や動物は、その欲求を解消する方向に行動を起こそうと思う。この状態が「動機」である。そして、うまく行動を起こす条件が整わないとせっかく持った欲求や動機は実現されない。行動を起こす要因には機械論的な動機論（ワトソン、スキナー）と 認知論的動機論等がある。「欲求→動機→目標に到達」の仕組みである。 内発的動機付け（ハント、ブルーナー）では、 知的好奇心に駆られて内発的に環境と関わりを持ち、積極的に環境を探索することにより発達や学習が促進されると見なす。認知論的動機論では、人は外的刺激を鵜呑みに取り入れて行動を起こすのではなく、内的条件との関係において情報を処理しつつ能動的に環境に関わる側面を持っている。と唱えられている。

(2) 「やる気」の発達

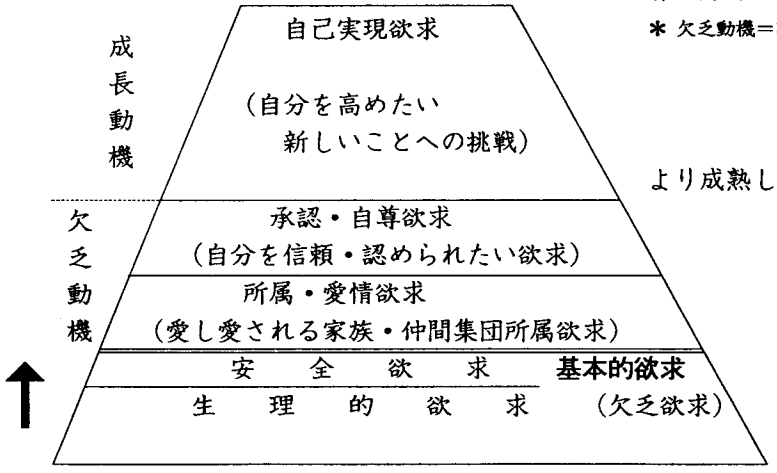
自立的な達成動機付けの促進のために、幼児期は、環境を自由に探索できる機会を与え、環境との相互交渉において、自分が有効に関われたと思えるコンピテンスを経験することが必要である。さらに、言語の発達を促すことも、自己の意志を他者に伝達することを可能にし、「自律的」な達成動機付けを促進すると共に「社会的比較に関して」の動機づけを促進することにもつながる。と言われる。「やる気」の主体は個人にあるが、特に学童においては他者の存在によって「やる気」を刺激される傾向は強い。また、自律を助ける大人も「受容→制限→介入」という態度をとるとよいとされる。

何事かに根気強く取り組んだ結果、新しい学習や発見の喜びを経験すれば、子供にも努力の意義が分かってくる。そうした意義や価値が認識できないものや、とてもできそうにもない課題であるときには、思い切りよく見切りをつけ、別の課題に移れる「決断」が必要である。「やる気」の高い人は「成功」を高い能力と努力の結果と評価し、「失敗」を努力不足に帰属させる。しかし「やる気」の低い人は、努力要因の認知をほとんど持たないため、類似の課題に対して「やる気」を持ちにくい。

したがって、実際の生活上の問題解決に当たっては、自己の努力により状況を変えられるのではないかと考えることにより、無力感の克服は可能になる。とアメリカのアルシュラーは述べている。さらに、よりよく達成したいという欲求はすべての人に内在していると仮定し、達成動機付けの訓練は、個人がすでに備えている達成欲求を満たすために独自の方法を発見するように励ますことだと考えた。下山剛は「達成能力の訓練では、まず自己を知ることから始める。今までに自分がどんなことを成し遂げてきたかを認識し、そのときに目標達成のためにどんなアイデアを用いたかを考えるなどの自己認識が、達成に深く関与する。」としている。これは、下図・**マズロウの考えに基づいている。**

＊ 成長動機＝自己実現の傾向により動機づけられること

＊ 欠乏動機＝不快や苦痛など最適な状態からはずれたときにそれを充足するために生ずる動機



より成熟した人間 →成長動機により動機づけられることが多い

(3) 「やる気」と自己実現

「やる気」があっても、それだけではただちに学業成績がよくなるわけではない。どうすればうまく「やり抜く」ことができるかという手がかり＝手段的活動をもつことにより、「やる気」という意欲が有効に働く。期待に認知が成立すると、潜在している「やる気」が「やり抜く」方向に動機づけられるということである。 また、現実の自己と理想の自己とのギャップの大きさは、「やる気」の大きい者の方が小さい者より大きいとされる。

マズロウは自己の可能性を十分に発揮し実現した人たちを、自己実現をする人たちであると言い、そのような人たちは、次のような特徴を持っていることを見いだした。

1　現実をより適切に認知し、好ましい関係を持っている。
2　自己自身を受容し、他者を受け入れ人間性を許容している。
3　思考、感情、行動などが自発的である。
4　課題中心である。
5　孤独を楽しみ、興味あることに集中できるなど、プライバシーの要求を持っている。
6　高度の自律性を持っている。
7　絶えず新鮮な気持ちで生活上の様々なものを鑑賞できる。
8　自分が全人類、自然全体の一部であると感じるような神秘的な経験を持つ。
9　全人類に対する社会的共同化感を持つ。
10　深く親密な人間関係を持つ。

成長動機により自己実現へと駆り立てられ、無心に生きる姿、そこには、人生という課題に専念する創造的な「やる気」が内在している。本物の「やる気」は、対象に出会いその対象の真善美をしろうと願い、愛する心を持って対話的な関係を持つことに他ならない。—**※宮本美佐子**「やる気」の心理学　創元社—このような「やる気」と「出会い」のある学級にしていきたい。

3　学び合う集団づくりと学級経営

一人一人の児童が、自ら学ぶ意欲を持ち、学び方が分かり、分かったことを相互に交流し高め合っていく営みを「学び合う」とおさえた。その過程を通して学ぶ価値、すなわち学習の意義や必要性に気づかせていく教育活動を、学級経営の基本に据えていく。

(1) 自ら学ぶ意欲について

「自ら学ぶ意欲」と「学習の仕方の習得」及び「生き方の探求」の三点が相互に関連し合い、機能し合って初めて自己指導力が身に付き、人間として生きる力が身に付いてくると考えられる。自分でもできるという可能性と自主的な学習の機会、学習の仕方が身に付くことで学ぶ意欲が育つと考える。

(2) 学び合う集団作りのための学級経営

ア　自主的な学習集団の形成
イ　個を生かす学習集団としての活動の展開
ウ　望ましい人間関係の確立

上のような学習集団にするには、特に道徳指導や学級活動の指導の充実を図り、人間尊重を基盤としたよりよい人間関係の確立を目指すことが強く期待されている。

そこで、アンケート調査によって、学校への関心、級友との関係、学習への意欲等について、学級の実態をつかむことにした。さらに、「聞く・話す」に関するアンケート調査を実施し、発表意欲や聞くことへの関心・意欲と学級の信頼関係についても実態をつかむことにした。

4　実態調査

(1)　SMT検査より　　実施日：5月8日　　対象：4年4組34人

番号	氏名	学校への関心	級友との関係	学習への意欲	総合平均
1	K．M	−1	5	6	3.3
2	H．S	3	3	4	3.7
3	K．K	−3	−3	−3	−3.0
4	M．M	2	−1	−4	−1.0
5	K．I	−3	1	6	1.3
6	K．T	−5	−3	−5	−4.3
7	J．S	−1	−1	2	0
8	M．A	−4	3	1	0
9	M．M	−1	1	−3	−1.0
10	T．O	−6	−1	−4	−3.7
11	T．K	−2	2	1	0.3
12	D．K	−4	6	6	2.7
13	T．T	−7	−2	−1	−3.3
14	D．T	−3	1	2	0
15	M．N	−3	3	3	1.0
16	H．S	1	4	5	3.3
17	H．N	−3	2	−1	0.7
18	K．H				
19	Y．I	−5	0	−2	−2.3
20	Y．O	−6	2	1	−1.0
21	Y．M	1	3	3	2.3
22	R．E	−4	2	−3	−1.7
23	E．T	−3	1	1	−0.3
24	A．H				
25	R．I	3	1	0	1.3
26	Y．K	−4	4	−1	−0.3
27	E．T	−5	3	−2	−1.3
28	N．T	−2	−1	−5	−2.7
29	S．O	−2	−1	4	0.3
30	M．H	−1	6	−2	1.0
31	A．Y	3	6	1	3.3
32	U．A	−5	1	−2	−2.0
33	R．T	−2	4	−6	−1.3
34	Y．S	−5	−1	−11	−5.7
35	M．T	−6	3	−3	−2.0
36	R．T	1	−1	−2	0.7
	合計	−82	52	−14	−11.7
	平均	−2.41	1.53	−0.41	−0.34

目的

学校や学級への帰属意識、級友との関係、学習への意欲について調査する。

結果・考察

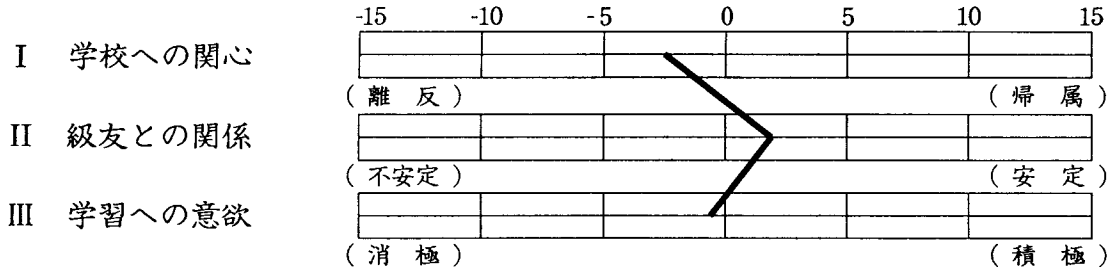
学級開きから間もない時期にアンケートを実施したためか、学級全体の「学校への関心」については、学校モラールに問題があるという結果であった。

「級友との関係」は、学校モラールは普通の範囲ではあるが不安定に近い結果であった。

「学習への意欲」も積極的とはいえない。

したがって、よりよい人間関係づくりと学習意欲を高めるための工夫が学級経営の重要な課題となる。

学級プロフィール

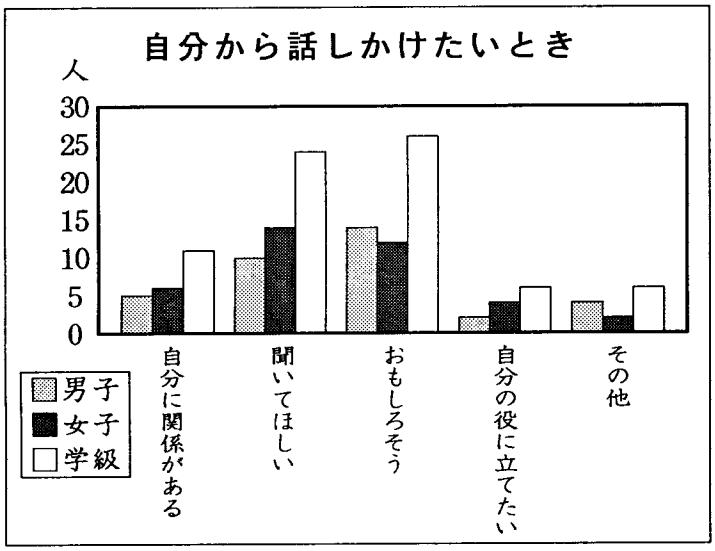


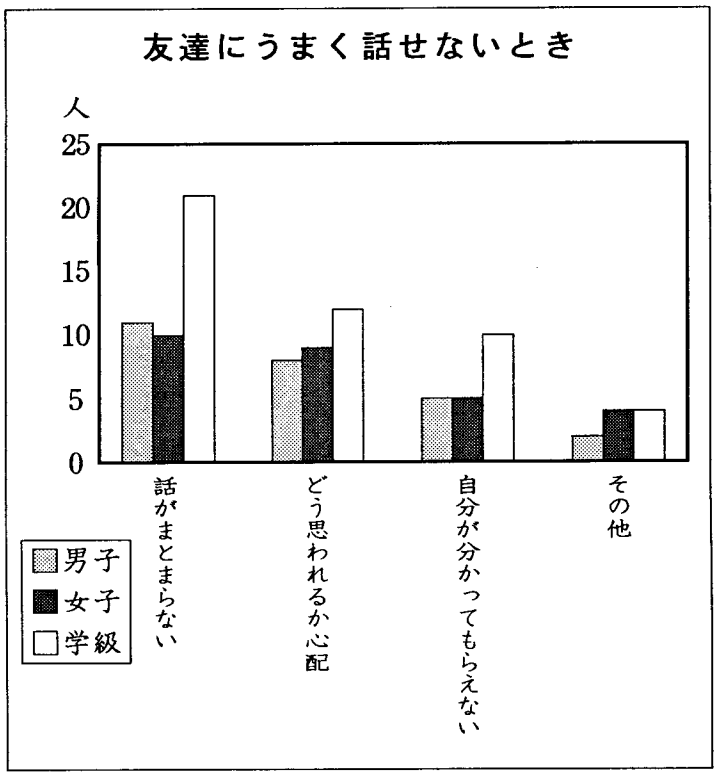
(2)　**「聞く・話す」に関するアンケートより**

「聞く・話す」に関する児童の傾向及び意識を知る手がかりとするために、アンケート調査を実施した。

実施日：平成10年５月２１日　　調査対象：４年４組　３６名

集計結果及び考察





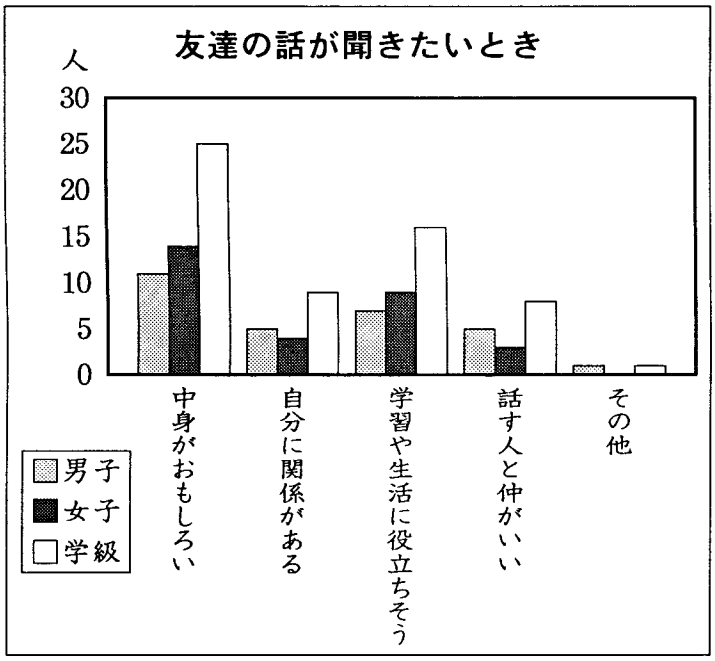
結果・考察

設問１「友だちに自分から話しかけたいと思うのは」に対して「おもしろそうなとき、聞いてほしいことがあるとき」が最も多いことから、内容のおもしろさと聞いてほしいという欲求をもたせることが、話すことへの意欲に結びつくことが分かる。

これに対して、「自分の役に立てたいとき」を選んだ児童は少なく、生活上の課題意識が低いことが原因と考えられる。自分なりの目標をもち、課題解決努力をする習慣を学年に応じて育てていくことが課題であると考える。

設問２の「友達にうまく話せないのはどんなとき」に対して「話がまとまらないとき」や友達にどう思われるか心配があるとき」が最も多い。また「友達に自分が分ってもらえないとき」を合わせると80％以上の児童が、友達との関わりを気にしていることが分かる。

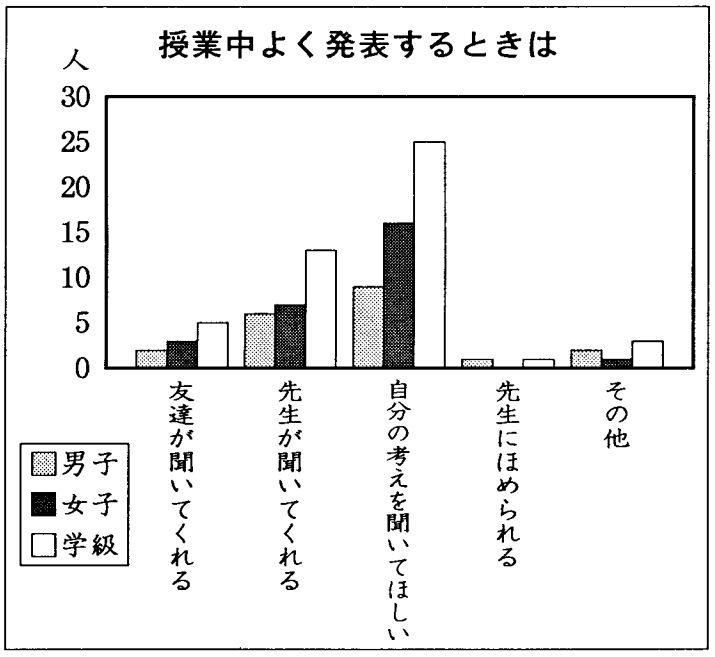
このことから、自分の考えを積極的に表現するためにはどんなことを言っても周囲が受け入れてくれるという安心感がなければならない。話す意欲は、安心して話せる人間関係、信頼頼関係が基盤にあって生まれるもので、それが、学級経営をする上で最も大切な要素であると考える。



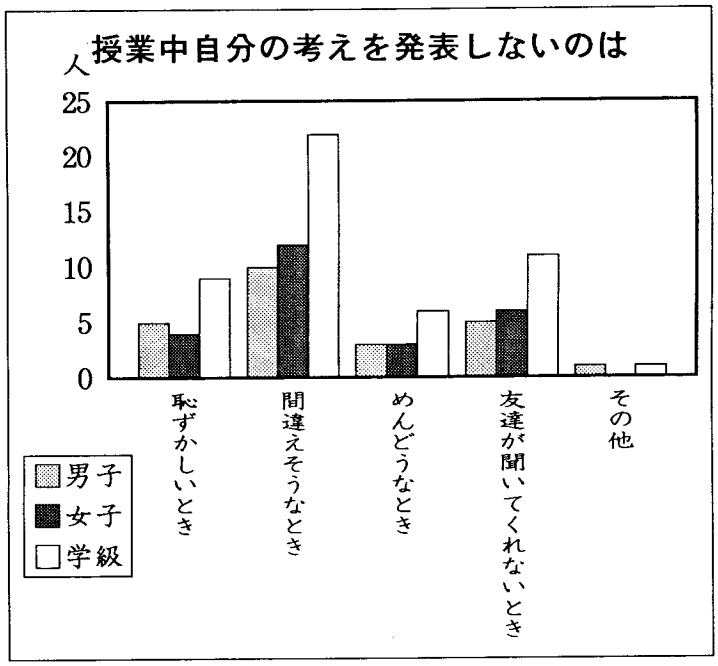
設問３の「友達の話が聞きたいときはどんなときか」に対して「中身がおもしろいとき」を90％以上が選び、「学習や生活に役立ちそうなとき」を選んだのと合わせると殆どを占めている。これに対して「話す人と仲がいい」を選んだのは少ない。

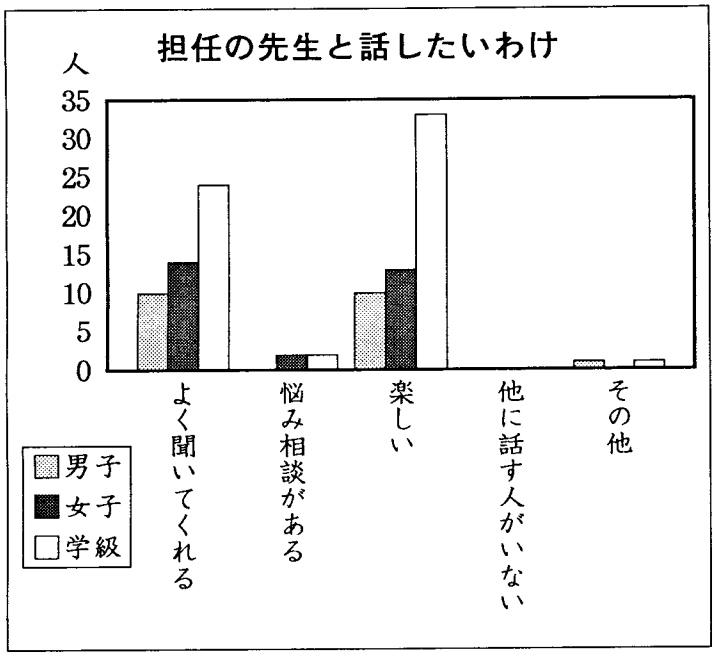
４年生では、話す相手より話の内容に重点が置かれるようになることが分かる。このことは、いろいろなことに興味・関心を向け自分の世界を拡大させていく学年の発達的特徴からくるものであると考えられる。

このことから、聞こうとする態度を育てるためには、第一に人間関係の在り方を改善すること、第二に興味や関心を持たせる工夫をすることが必要であると考える。



設問４の「授業中、自分の思っていることをよく発表するのはどんなとき」に対して「自分の考えを聞いてほしいとき」が殆どである。「先生や友達が聞いてくれるとき」が少ないのは、４年生では、担任や友達の関わりより、自分の考えを聞いてほしいという内的要求が発表への意欲につながることが分かる。「聞いてほしい」という意欲をさらに高めるような指導の在り方、「聞いてほしい」という内的欲求を満たしてやれるゆとりある授業設定が、工夫されなければならない。また、しっかり聞き取ってくれる人がいることが、発表意欲に欠かせない条件であることが分かる。このことからも、児童と教師・児童同士の信頼関係の樹立「友達の話を最後まで聞く」という学習習慣の育成が、学級経営上、大切な要素になることが分かる。





設問4とは反対に、発表意欲を阻害している原因を調べたのが設問5である。全体の約60％の児童が、自分の考えを発表しないのは「間違えそうなとき」を挙げている。

間違えても笑われたり非難されたりしないという安心感、信頼関係が発表意欲の基盤となることが分かる。間違えや失敗を笑わない学級作り、児童相互・児童と教師の信頼関係を基盤に、間違うことをおそれず安心して発表できるよう指導を工夫していく必要がある。

「授業でないとき担任の先生と話したいですか」に対して「話したい」が、全員であった。そのわけとして、「楽しい、よく聞いてくれる」を挙げている。このことは、担任教師が親身になって話を聞き、何かあったときにその解決への努力をしてくれるという信頼関係、好ましい人間関係を児童との間に育むことが学級経営の原点であり、「聞く・話す」意欲や習慣作りの原点でもあるといえる。さらに、教師自身が児童に人間的な魅力を感じてもらえような話題が提供できる豊かな人間性を磨く努力が必要だと考える。

以上の実態調査の結果から、「聞く・話す」に関する意欲を阻害している要因として**①児童と児童の人間関係、信頼関係が十分に育っていないこと、②課題意識や目的意識が希薄なことの二点が明確になった。**そこで、自ら学ぶ意欲を高め、学び合う集団にするために次のような手だてが必要であると考える。

- 興味関心のある課題の設定
- 課題意識がもてるような場面の設定
- 見通しのもてるような手だて
- 安心して聞いたり話したりすることができる人間関係、信頼関係作り

5　学び合う態度の確立を目指す学級経営

(1)　年間の見通し

学期	学級作りの目標	指導の重点	学習面での重点
I 学期	◎みんなが仲良くなる学級 ○誰とでも遊び、助け合える学級にする。	○誰とでも遊び、助け合えように、グループでの活動を活発にする。	○一人一人が意欲を持ち、ねばり強く学習するように学び方・授業の受け方を定着させる。
II 学期	◎助け合って高め合う学級 ○みんなで決めて、みんなでやり遂げていく学級にする。	○子供の願いが実現するように、決めたことを一つひとつ実行する。	○子供同士で助け合ったり、教え合ったりできるようにグループ学習を活発にする
III 学期	◎みんなでのびる学級 ○計画を立て、みんなの力がのびていく学級にする。	○一人一人の力が発揮できるような、自主的な活動をつくりだす。	○どの教科も集中し、うち込める授業にする。 ○遅れた子も克服できるようにしていく。

(2)　年間指導のポイント

月	学級作りの視点	指導のポイント	授業・学習の指導のポイント	「学び合う過程」内容と場『語り』の題材
4	○「学級開き」で学級目標を作る。 ○生活班で競争する。	○誰とでも遊び、助け合えるように、生活班での活動を土台にする。	○「授業開き」をやる。 ○集中への取り組み。「集中は○秒」に取り組む。 ○始まったら着席する。「チャイム着席」に取り組む。	＊『自分と仲良くなるために』 ＊『友達と仲良くする秘訣』 ＊『いっしょに違いを探そう』演習 ＊「生い立ちの記」書き始め ＊『耳は二つ、口は一つ』
5	○生活班での活動を活発にする。集団遊びをやる。	○ひとりぼっちの子がいないように、集団遊びや班での取り組みをやる。	○一斉音読・一斉問答を定着させる。 ○学習スタイルを教えていく。 ○各教科の学び方を身につけさせる。	＊『タンポポの知恵と人間の知恵』 ＊「一斉学習、グループ、ペア学習、一人学びのスタイルとルール」 ＊『ホメホメ箱』作り
6	○一学期として、一つの盛り上がる取り組みをやる。	○子供のつながりを広げていく。 ○班長の活躍する場を作る。	○学習の準備と、一人学びができるようにする。 ○学習班を使った授業をする。	＊『大工さんの腕前』 ＊『目を閉じてゆったりと』 ＊「一人学びの仕方」 国語、算数、
7	○一学期のまとめと夏休みの準備をする。	○活躍をしていない子や問題を抱えた子が、活動できる場を作る。	○全員発言の取り組みをする。 ○学習班での話し合いをする。 ○学習リーダーを指導する。	＊『学びのプロ』 ＊「情報の集め方」 ＊『成すことによって学ぶ』 ＊『子を失った親』

8	○夏休みの過ごし方、生活班での行動を計画する。	○全校出校日、図書館開館日、プール開放日の計画を立てる。 ○地域でできる行事を計画する。	○地域でできる「勉強会」を計画し実行する。 ○自由研究をする。	
9	○学校行事を学年・学級で達成し、力をつけさせる。	○行事の中で、子供の力が発揮できるような行事にしていく。	○学習スタイルを定着させる。 ○全員発言に取り組む。 ※初めの指導を繰り返す。	＊『天国と地獄』 ＊「ディベート」その1
10	○二学期として、のびていく節目を作る・盛り上げる。	○文化的な活動（読書、音楽など）や遊びの会を発展させる。 ○学級内クラブをつくる。	○「聞く」「話す」「討論する」など、応答の仕方を定着させる。 ○分からない子への取り組み。	＊「ディベート」その2 ＊『名前＝命』
11	○グループでの自主的な活動を創り出す。	○生活班で自主的に計画し実行していけるようなものを実施する。	○自主学習を活発に創り出す。 ○家庭学習、自由研究をする。	＊『働く＝端を楽に』
12	○二学期としてのまとめをやる。	○子供たちの力で、まとめの会がやれるようにする。 ○班長会の力を出させる。	○討論のある授業を定着させる。 ○自主学習が活発にやれる。	＊「ディベート」その3 ＊『家族』
1	○学習する意欲を創り出す。 ○グループ学習を活発にする。	○学級全体の目標と、班の目標、個人の目標が達成できるようにする。	○学芸会への取り組みなどで、子供の力が発揮され追求力も強くなるようにする。 ○自主的学習が活発にやれる。	＊『人皆我が師』 ー長野オリンピック選手銘語録ー
2	○授業参観や学芸会で盛り上げる。	○学習に対する追求力を育てる。	○討論のある授業を定着させる。	＊『こども→こどな→ことな→おとな』
3	○一年間のまとめの月にする。 ○次の学年の準備をする。	○学級集団としての歩みをしるす。 ○一人一人の成長を確かめる。	○一年間のまとめの学習をする。	＊「1／2成人式・生い立ちの記の編集」

V　実　践

実践１　『語り』

第４学年　学級活動学習指導案

平成10年　６月９日（火）
志真志小学校　４年４組　36名
授業者　　新　垣　幸　枝

１　題材名　『耳は二つ、口は一つ』

２　題材設定の理由

一人一人の子供が、自ら学ぶ意欲を持ち、学び方が分かり分かったこと相互に交流し合う「学び合う」過程には、「聞く・話す」活動が必然として行われる。

しかし、友達同士楽しそうに話している本学級の子供たちの様子を観察すると、「自分の思いや感動・考えを聞いてほしい」という欲求が強すぎるあまり、それぞれが一方的に話している場合が多い。さらに聞き手も漫然と聞いているなど、対話もしくは会話として成り立っていない場面も多い。授業時においてもそれがいえる。発表意欲は旺盛だが、頷いたり相づちを打ちながら聞いたりする態度的な面はもちろん、話の中心的な内容をおさえて聞いたり、主体的に聞き取って考えを深めたりする能力は、充分ついているとはいえない。話し手の一方通行の感は否めず、相手理解そして情報交換の場としては不充分である。一方、必要な時に必要なことを必要なだけ、きちんと話せる子供も少ない。聞き手によく分かるように筋道立てて話すことは難しい。きちんとした話し言葉を身につけさせるためには、きちんとした指導をすることが大切である。

その際考慮すべきは、学級の雰囲気である。民主的、開放的なクラスであると子供たちの話し合い活動は自由活発に行われ、能力も大きく育つ。逆に対人関係で懸念されるところがある場合には、子供たちの心は閉ざされ、話し合い活動に直接的に悪影響を及ぼす。音声言語の特徴が、個性的・個人的なものであり、相手意識の強いものであるから、互いにコミュニケーションが交わされる「場」が生まれる。

そこで、本題材を設定し「学び合い」の基盤としての「聞く・話す」ことの意義や価値について、４年生の発達課題をふまえて語り聞かせる。『語り』は「聞く」ことに焦点を当てた内容にし、子供たちの心を通して、その大事さに気づかせる。そして、「話す」ことに比べて手薄になりがちな「聞く」ことの指導・支援を強化し、これからの「聞き合い・学び合い」の活動の根底にしていきたい。

３　本時の目標

○人間には耳が二つ、口が一つついているわけを考えながら語りを聞くことができる。
○二つ聞いて、一つ話す、口は人を思いやる言葉のためにこそ生かしていかなければならないことに気づかせる。
○これからの自分の聞き方、話し方について、めあてをもつ。

４　授業仮説

○学級活動で『語り』を聞く場面において、人間の耳と口の働きを再認識させ、それにまつわる教師の実体験を語ることによって、相手を思いやる「聞き方・話し方」の価値に気づくことができるであろう。

5　本時の計画

過程	学　習　活　動	指導・支援、　留意点
気づく・つかむ	1　題名から内容を予想する	○未完成の「人間の顔」を黒板に貼りだし、インパクトを与え、話し合いながら顔を完成させる。
	2　人間には、なぜ耳が二つ、口が一つついているか予想し自分の考えを書く。	○当たり前のことを改めて自問自答させることによって「揺さぶり」をかけ、課題意識を明確に持たせる。
	3　予想を発表し合う。	○出された様々な考え方を承認していく方向で発表させる。
考える	4　『語り』を聞く。	○教室中央に場を設定し雰囲気作りをする。 ○一つの考えを紹介するという立場で、『語り』を始める。 ○表情、声量、間、等を工夫し、一人一人にしんみりと語るようにする。
比べる・まとめる	5　はじめに予想したことと、『語り』を聞き終わって後とを比べて、感想や考えを話し合う。	○比較させることによって、感じ方、考え方の違いに気づかせつつ、「二つの耳で聞くこと、一つの口で話すこと」の意味を確かめさせる。
	6　これからの自分の目当てを書く。	○今日の気づき・成長がどんなことであるか、これからどうしたいのかという観点で書かせる。

実践２　『ディベートゲーム』

第４学年　学級活動学習指導案

平成10年６月18日（木）
志真志小学校４年４組36名
授業者　　新　垣　幸　枝

１　学び合う学級経営における「ディベート」

「聞き合い・学び合う」学級作りには、ディベートは有効な手段であると考える。そのよさは①肯定・否定に同数で分かれて交互に発言するので、論点がかみ合い易く活発な討論ができる。②「人」と「論」が区別され、安心して発言でき情報交換の場となり易いなどが挙げられる。

学校生活全般にわたって、「人の話をよく聞きましょう」「自分で考えてはっきり話しましょう」という指導は繰り返されてきている。しかし子供たちは、おしゃべりは上手だが、「聞くこと・話すこと」の必要性については受け身的であり、自発的な意欲も十分ではない面が見られる。自分から進んで意欲的に話す・聞くという場面を設定する必要を常に感じてきた。

ディベートはゲームである。子供たちはゲームが大好きである。ディベートでは「聞く・

話す」という行為そのものがゲームの勝敗を決める。したがって、子供たちはゲームで勝つために「声を大きくして話そう、はっきり話そう」とする。「とにかく何か話そう」とする。また、相手の意見をよく聞いていないと、それに対して言い返せないので「聞こう」とする。審判もまた、両方の意見をよく聞いていないと、大事なゲームの勝敗の判定が出せないので、「よく聞こう」とする。子供たちはこのゲームで「聞くこと・話すこと」の必要性を実感する。そして楽しみながら自然に「聞き方・話し方」が分かりだんだんと習慣化され、できるようになると考える。

2　論題と定義について

＜論題＞「４年４組は、ハムスターを飼った方がよい」
　　※子供たちがディベートに慣れていないので、教師が論題を考えた。
＜定義＞　※今回は特に決めず、ディベートゲームを何回か重ねていく中で、定義の必要性に気づかせていく。

５月半ば、ペット好きな子たちが、「学校内の他のクラスのように、４年４組でもハムスターを飼いたい・・・」と担任に相談を持ちかけてきた。学級全体の問題だから全員で話し合うようにと投げかけると、朝の会などで何度か提案するが、反対者の強い意見に阻まれている様子である。そこで、全員が納得するまで話し合うには、ディベートゲームが最適と判断し今回の論題にした。論題の定義づけは非常に重要である。論題で使っている言葉の意味をディベーター、審判ともに同じ意味にとって共通理解していないと、話し合いを始めたとき内容がかみ合わなくなってしまう。しかし、ディベートを何回か取り組んでいく過程で、子供たち自身にその必要性に気づかせたいと考えている。

3　児童の実態

(1)　学級の雰囲気

全体として明るく活動的である。女子は落ち着いて行動する子が多く、責任感が強く自発的である。男子はスポーツ好きな子が多く、休み時間ともなると一緒にボール遊びに興じている。また自己主張が強かったりわがままな態度をとりがちな子がいるため、喧嘩やトラブルを起こしがちである。そのたびに当事者の個人指導と併せて、全体の問題として取り上げ話し合い、解決策を見つけ合う指導をしてきた。その結果、少しずつ落ち着き学級全体としての人間関係や学習の雰囲気がよくなりつつある。

(2)　聞く・話す

自分の考えを発表することはできるが、友達や先生の考えの中心点を聞き取ることが、全体的に不充分である。また積極的に、自分の考えと比べたり自分の考えを深めようとするための態度や姿勢もまだ育っていない。

「聞く・話す」についてのアンケート調査では、授業中「自分の考えを発表しない」のは「間違えそうなとき」や「友達が聞いてくれないとき」が大多数であった。そのことは「どんな意見でも受け入れる環境」「自由に意見を言い合える環境」づくりの重要性を示している。

(3)　ディベートについて

学級全体で初めてディベートゲームを仕組んでから、今回で２回目である。子供たちはディベートに対する関心はもっていた。しかし、それによって学級のめあてや決まりが決定づけられるのではということへ不安も伴っていた。そこで、あくまでもゲームであるということを強調すると、多くの子が乗ってきた。一回目は、ルールや言葉、

進め方などについて理解する段階として、「ランドセルよりリュックの方がよい」という論題で、ゲームを行った。

子供たちは、ディベートゲームの進め方や立論の言い方、反論の言い方、質問の仕方などは分かりかけてきた。そして、ディベーター同士よく話し合って強い立論を作ること、自分たちの主張の裏付けとなる資料を用意すること、はっきりと大きな声で発表することなどの重要さに気づき始めた。

「反論」や「フリートーキング」では、相手の意見の弱点をついたり、質問に即座に答えたりしなければならず、論理的に考えることができないとなかなか参加しにくい。論題によっては、特定の子ばかり発言してしまう結果にもなりかねないので、慣れるまでは、取材活動や裏付けが難しくならないようなものにしていきたい。

判定を下す審判に関しては、一回目は発表の仕方や態度に判定の基準が重くおかれていた。これからは徐々に「話の内容」「質問・答えのやりとりが矛盾せず、かみ合っているか」というところに重点がおかれるようにしていく。そのための「聞き方」「メモの取り方」について指導をしていく。

4　活動計画

	学　習　活　動	留　意　点
事前	○論題を受け、肯定側・否定側両方の立場で、自分の意見を書く。	・論題に対しての自分の見方、考え方を明確にするようにアドバイスをする。
	○グループを決める。 ・ディベーター　6人対6人 ・司会、時計　4人 ・判定人（審判）　20人	・できるだけ本音の立場になれるようにしつつ意欲、発言力も考慮して決める。
	○肯定側・否定側それぞれの立場で、 ・立論の作成 ・リサーチ（情報・材料収集） ・資料の作成 ・作戦や練習などを行う。	・同じ側の立場のグループで話し合うことにより　論題に対しての自分の見方・考え方をさらに深めさせる。 ・資料の提供やリサーチの仕方、有効な表現方法について助言をする。
本時	○ディベートゲームを行う。 フォーマット 1　肯定（賛成）側立論　（5分） 2　否定（反対）側立論　（5分） 3　作戦タイム　（4分） 4　否定（反対）側反駁　（4分） 5　作戦タイム　（4分） 6　肯定（賛成）側反駁　（4分） 7　フリートーキング　（6分） 8　作戦タイム　（4分） 9　否定側最終弁論　（2分） 10　肯定側最終弁論　（2分） 11　判定と意見発表　（5分）	・勝つためにはどうすればよいか常に考えさせる。 ・フリートーキングでは、質問でも意見でも自由に発表できる時間として設定する。 ・判定はフロアー側が受け持ち、一人ずつ発表する。できるだけ全員に発表させる。
	○教師の講評を聞く。	
事後	○前時のゲームを振り返り感想を書く。 （家庭学習、学級活動）	・次時のゲームへの意欲付けになるように配慮する。

ディベート学習の手引き　　志真志小学校4年

＜司　会＞

1 第（　）回、ディベート学習を始めます。今日の論題は、『　　』です。
肯定側から、立論をお願いいたします。時間は、（　　）分です。
2 続いて、否定側の立論を（　　）以内でお願いします。
3 これから作戦タイムに入ります。否定側は肯定側に対する質問をまとめてください
肯定側は否定側の質問に答える準備をしてください。フロアーのみなさんは判定メモを記入してください。
4 否定側の質問を開始します。否定側のみなさん、よろしくお願いします。
5 これから作戦タイムです。肯定側は否定側に対する質問をまとめてください。
否定側は肯定側の質問に答える準備をしてください。フロアーのみなさんは判定メモを記入してください。
6 これから肯定側の質問を開始します。肯定側のみなさん、よろしくお願いします。
7 フロアーからの質問を受けます。フロアーのみなさん質問はありませんか。
8 質問を打ち切らせていただきます。
9 これで質問を打ち切らせていただきます。これより最後の作戦タイムです。
お互いの質問事項を上手に取り入れて、最後の弁論に役立ててください。
10 いよいよ最終弁論です。否定側からお願いします。時間は、（　）分以内です。
11 ありがとうございました。肯定側の最終弁論をお願いします。（　）分以内です。
12 ディベーターのみなさん、ありがとうございました。これから判定を行います。
フロアー側からその結果と理由を述べてください。
13 先生の感想をお願いします。

＜ディベーター＞

1 立論の述べ方（言い方）
・わたしは『・・・　』について肯定（否定）します。その理由として、まず（第一に）・・
・（次に）第二に・・・・そして（第三に）・・
以上三つの理由から、わたしは　『・・・』について肯定（否定）します。
※相手を説得するのに有利な材料・資料
（発言の効果をあげるもの）　①図書館資料、新聞資料　②アンケート調査　③インタビュー
☆必要なときに使うと、効果的な言葉
①「例えば」　②「そこで」③「要するに」
④「　　」⑤「　　」
2 相手側の質問を予想して、対策を考えておきましょう。
3 メモを取りながら友達の意見を聞きましょう。

＜フロアー＞

1 立場をはっきりさせる。・・『わたしは肯定（否定）側に賛成（反対）します・・』
2 結論をしっかり述べる。
3 意見、質問、感想の区別をする。
『否定（肯定）側に質問（反対）します・・』
『ぼくは・・・・・と思います。』←意見

5　本時の活動

(1)　本時の目標

- 楽しくディベートを行うことができる。
- 自分の考えを明確にし、聞き手に分かるようにはっきりと伝えることができる。
- 友達の意見をよく聞き、自分の考えと比べて共通点や違いに気づくことができる。
- 友達の意見をよく聞き、公平に判定を行うことができる。

(2)　授業仮説

- ディベートの反駁場面において、司会の指名順の工夫と発言内容に対する振り返り、及びまとめ方の工夫を促すことによって、友達の意見と自分の考えとを比べて聞き、共通点や違いに気づくことができるであろう。

(3)　本時の展開

学　習　活　動	支　　援　＊仮説検証
◎論題を確認する。 「４年４組はハムスターを飼った方がよい」	・司会は論題を読み上げる。 ・論題とプログラムは掲示しておく。
１　肯定（賛成）側立論　（５分） ・判定者（フロアー）は立論をメモする。 	・制限時間いっぱいまで有効に使わせるようにする。 ・相手の立論をしっかりメモさせる。 ＊　☆ディベーターには、「手引き」を参考に、一人一人、立論の述べ方に慣れさせ、自信をつけていった。

2　否定（反対）側立論（5分） ・判定者（フロアー）は立論をメモする。	・ディベート中は作戦タイム時に、必要に応じて相談、アドバイス、励ましなどの支援を行う。
3　作戦タイム　（4分） ・相手の立論のどの点をどう攻めるか話し合う。 ・判定者は立論の採点を行う。 	・質問されたことに対しては、必ず何らかの返答をするよう心掛けさせる。 ＊ 「ハムスターはかわいいので、学級が楽しくなり、それの世話を通して友達とも仲良くるということを、飼った経験から話せば、否定側の『世話がたいへん』『ウンチやオシッコが臭い』の意見に対抗できる。そのことを宇華さんが言って、その次は・・・」 ☆勝つために真剣に作戦会議していた。
4　否定側反駁　（4分） ・肯定側に対して、立論の疑問点、内容などを追求して、肯定側の立論が成立しないことを述べ自分たちの立論が成立することを強調する。 ・判定者は反駁の内容をメモする	＊ 「ハムスターがかわいいからといって飼うというのは、ハムスターがかわいそうです。なぜなら、ハムスターは夜行性で、昼は静かにしていたいのにみんながさわったりすると、ストレスになると幼稚園で読んだ本に書いてありました。だから、ぼくは『ハムスターを飼うべきか』を否定します。 ☆経験からだけでなく、本やその他からも情報を集めて多角的に考えて意見を述べ、相手を説得している。タイミングも良い。
5　作戦タイム　（4分） ・相手側の反駁を受け、さらにどう攻めるかを話し合う。 ・判定者は反駁の採点を行う。	・反駁で不利になった点を補えるようにさせる。
6　肯定側反駁　（4分） ・否定側に対して、立論の疑問点内容などを追求して、否定側の立論が成立しないことを述べ自分たちの立論が成立することを強調する。 ・判定者は反駁の内容をメモする	＊ ☆否定側から出された「餌代」「飼い方」などに対する不安材料については、近くのペット店から取り寄せた情報で反駁していたが、相手の意見に沿うような形では、十分に表現できずにいた。ディベートの技術として、相手を全面否定するのではなくて、肯定しながらさりげなく否定する進め方が有効である。
7　フリートーキング（6分） ・反駁の続き、質問、意見など自由に発表する。 ・判定者は意見の内容をメモする。	・司会の仕方や指名の順等に気をつけ、両方の意見を順番に聞くようにさせる。

8　作戦タイム　　（4分）
- 最終の主張に向けて話し合う
- 判定者は、フリートーキング内容の採点を行う。

9　否定側最終弁論　　（2分）
- 相手の批評をふまえた上で、さらに自分たちの立論が成立することを述べる。

10　肯定側最終弁論　　（2分）

11　判定と意見発表
- 判定者は判定結果を述べる。（勝敗、良かったところ、直したいところ、の発表等）
- 判定結果を聞く

◎教師の講評を聞く。

＊検証場面

☆　論題、論点に照らして、互いの持ち合わせている材料を十分出し切っているか振り返らせたり、フロアー側の意見を出させたりする場面である。初ディベートゲームということもあって、全体として不慣れからくる戸惑い場面であった。特に、フロアー側の役割の認識不足が見られ、意見を聞くだけの役割だと勘違いしていた子が多かった。

今回は、ディベーター側を中心に支援してきたためであろう。友達の意見と比べて聞き、共通点、相違点をはっきりさせて、なお自分の意見が述べられるようにしていきたい。そのためには、論題に対する情報収集がディベーター同様に必要であり、その段階でのステップ指導と支援を大事にしたい。

- 意見の言い残しがないようにさせる

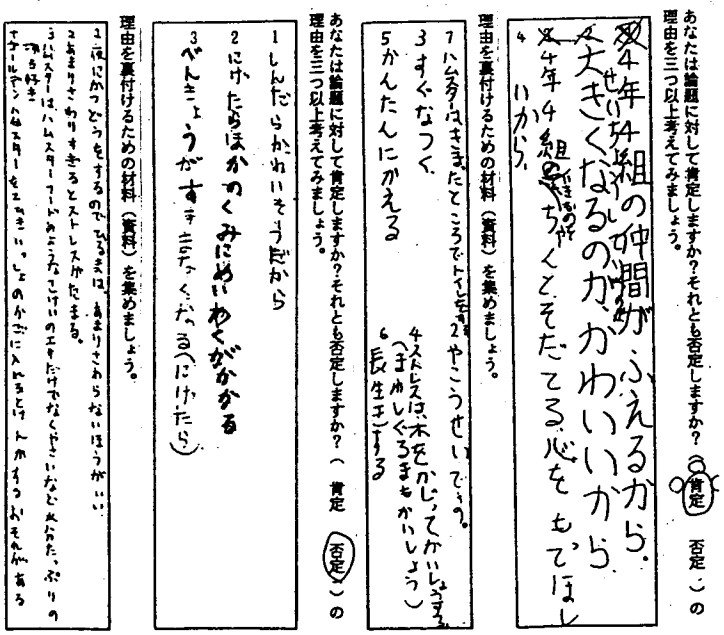
- 判定者は判定理由を具体的に伝えるようにさせる。

- 良かった点、努力点などを助言し、次回の意欲へとつなげるようにする。

(4)　評価

- 楽しくディベートを行うことができる。
- 自分の考えを明確にし、聞き手に分かるようにはっきりと伝えることができる。
- 友達の意見をよく聞き、自分の考えと比べて共通点や違いに気づくことができる。
- 友達の意見をよく聞き、公平に判定を行うことができる。

学習記録　　ワークシート


あなたは論題に対して肯定しますか？それとも否定しますか？（肯定　否定）の理由を三つ以上考えてみましょう。

4年4組の仲間がふえるから。
大きくなるのが、かわいいから。
4年4組のみんながくとそだてる心をもてるから。

理由を裏付けるための材料（資料）を集めましょう。

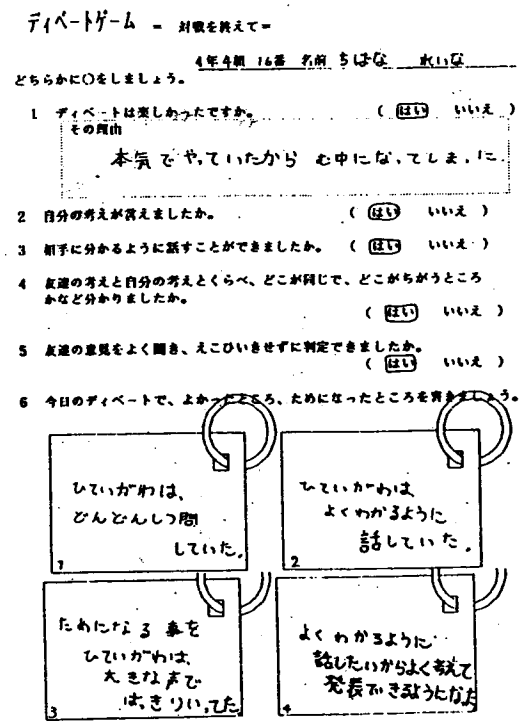
1 しんだらかわいそうだから
2 にげたらほかのくみにめいわくがかかる
3 ペットをかうのがすきなくらい（にげたら）

あなたは論題に対して肯定しますか？それとも否定しますか？（肯定　否定）の理由を三つ以上考えてみましょう。

1 ハムスターはきもちがたてころでトイレをする
2 やこうせいでいう。
3 すぐなつく
4 ストレスは、本をかじってかいしょうする（まかしぐるまもかいしょう）
5 かんたんにかえる
6 長生きする

理由を裏付けるための材料（資料）を集めましょう。

1 夜にかつどうをするのでねるまは、あまりさわらないほうがいい
2 あまりさわりすぎるとストレスがたまる。
3 ハムスターはハムスターフードのようなこけいのエサだけでなくさいなどもあたえ、ぶりの味も好き。
4 ケージはハムスターをきいっぱいのかごに入れるだけ入れるうんそんがある


ディベートゲーム ― 対戦を終えて ―

4年4組 16番 名前 ちはな　ゆいな

どちらかに○をしましょう。

1 ディベートは楽しめましたですか。（はい　いいえ）
その理由
本気でやっていたから　むちゅうになってしまった。

2 自分の考えが言えましたか。（はい　いいえ）

3 相手に分かるように話すことができましたか。（はい　いいえ）

4 友達の考えと自分の考えとくらべ、どこが同じで、どこがちがうところかなど分かりましたか。（はい　いいえ）

5 友達の意見をよく聞き、えこひいきせずに判定できましたか。（はい　いいえ）

6 今日のディベートで、よかったところ、ためになったところを書きましょう。

1 ひていがわは、どんどんしつ問していた。
2 ひていがわは、よくわかるように話していた。
3 ためになる事をひていがわは、大きな声ではっきりいった。
4 よくわかるように話したいからよく考えて発表できるようになった

Ⅵ　研究の成果と今後の課題

1　実践における子供の姿から見た仮説の検証

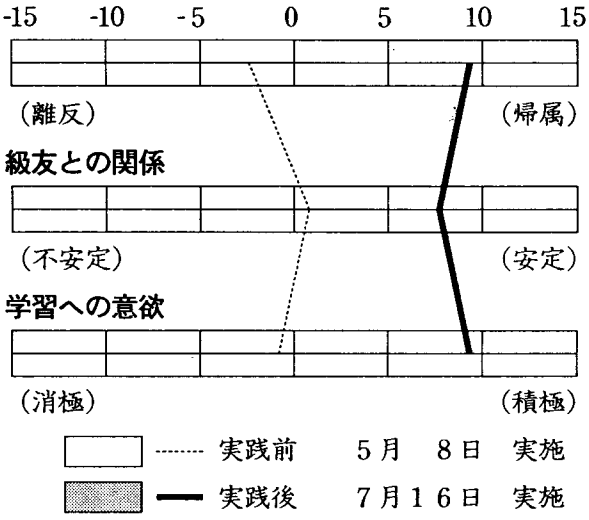
今回のディベートゲームで子供たちがいちばん意識していたのは、ゲームの勝敗である。子供たちは勝つために調べ、話し、聞いた。「ハムスターを飼った方がよいか」または「なぜ飼わない方がよいのか」理由を思いつく限り考え、立論をまとめ、資料を集め、発表の仕方を練習し、相手の意見を予想し答えを予想するなど、懸命に準備していた。そして、本時では真剣に相手の意見を聞き取り、全力で自分たちの意見を述べていた。フロアーも懸命に両方の意見を聞いていた。学級全体が、一つの論題についての討論に集中することができた。このことは、仮説の「学び合う過程を重視し、練り合い認め合う場で達成感や成就感がもてる」手だての一つとして、効果があったのではないかと考える。それは、上記の学習記録からもうかがえる。

学ぶ価値や喜びを見つけさせるための「生き方の語り」は、学級全体の雰囲気とタイミングを適切に捉えて実践することによって、効果を挙げることができた。学級集団の中での学び合いは、互いの思いや考えの聞き合いによることが多いからこそ、思いやりを持って相手の話を聞くことの意義が大きい。そのための『耳は二つ、口は一つ』だと再確認できた子が26/34人いた。また、実践２「ディベートゲーム」では、たとえ違えても「だいじょうぶ」と励まされ、言葉に詰まっても「がんばれ」と声がかかり、何を言ってもばかにされない自由に意見が言い合える雰囲気を学級に生み出すことで、子供たちは、「話す」ことを恐れなくなり意欲的になる。また自分の意見を受け入れてもらえる嬉しさから、友達の話も聞いてあげようとするようになった。（アンケート調査結果　30/34人）

話すべき内容があり聞くべき状況があって初めて、よりうまく話そう、よりうまく聞こうという向上心が出てくる。「リサーチして得た情報を話したい」「相手を説得するようにうまく話したい」「相手の話をしっかり聞いて勝負に勝ちたい」というような意欲につながる。このようにして児童の課題意識が生まれて「聞く・話す」意欲が高まり、練り合い学び合う活動となった。しかし、その中で得た喜びや成就感が自己実現への意欲となり、生きる力の基礎となるためには、実際の場での適切な継続した支援が必要である。論題の決め方、情報収集段階でのリサーチの仕方、相手の意見を予想をし反駁していくこと、メモを取りながら聞くこと、などについてはこれからも支援していきたい。

番号	名前	学校への関心	級友との関係	学習への意欲	総合平均
1	K.M	−1	5	6	3.3
		0	0	0	0
2	H.S	3	3	4	3.7
		4	6	2	4
3	K.K	−3	−3	−3	−3
		12	7	7	11
4	M.M	2	−1	−4	−1
		2	3	3	2.7
5	K.I	−3	1	6	1.3
		7	4	7	6
6	K.T	−5	−3	−5	−4.3
		8	12	5	8.3
7	J.S	−1	−1	2	0
		10	8	12	10
8	M.A	−4	3	1	0
		9	5	4	6
9	M.M	−1	1	−3	−1
		11	5	10	8.7
10	T.O	−6	−1	−4	−3.7
		12	10	12	11.3
11	T.K	−2	2	1	0.3
		11	7	11	9.7
12	D.K	−4	6	6	2.7
		13	9	13	11.7
13	T.T	−7	−2	−1	−3.3
		13	11	12	12
14	D.T	−3	1	2	0
		2	4	3	3
16	H.S	1	4	5	3.3
		5	4	3	4.3
17	H.N	−3	2	−1	0.7
		14	8	11	11
18	K.H				
		9	8	7	8
19	Y.I	−5	0	−2	−2.3
		11	9	13	11
20	Y.O	−6	2	1	−1
		5	9	8	7.3
21	Y.M	1	3	3	2.3
		7	8	4	6.3
22	R.M	−4	2	−3	−1.7
		11	7	6	8
23	E.T	−3	1	1	−0.3
		8	3	5	5.3
25	R.I	3	1	0	1.3
		7	4	7	6
26	Y.K	−4	4	−1	−0.3
		14	13	12	13
27	E.T	−5	3	−2	−1.3
		8	2	6	5.3
28	N.T	−2	−1	−5	−2.7
		7	8	11	8.7
29	S.O	−2	−1	4	0.3
		8	4	4	5.3
30	M.H	−1	6	−2	1
		11	8	2	7
31	A.Y	3	6	1	3.3
		13	13	14	13.3
32	U.A	−5	1	−2	−2
		6	5	9	6.7
33	R.T	−2	4	−6	−1.3
		15	14	13	14
34	Y.S	−5	−1	−11	−5.7
		13	12	11	12
35	M.T	−6	3	−3	−2
		14	7	9	10
36	R.T	1	−1	−2	0.7
		11	15	12	12.7
	合計	−82	52	−14	−11.7
		311	252	272	278.6
	平均	−2.41	1.53	−0.41	−0.31
		9.15	7.41	8	8.19

2　SMT検査結果（事前・事後）の比較から見た仮説の検証
＜学級プロフィール＞



SMT検査の結果からみると、児童相互の人間関係、教師と児童との信頼関係をより密にし、安心して話ができる雰囲気作りをすることが、学び合う集団にするための大切な基盤であるといえる。そのためには、話し方、聞き方の手だてはもとより、学ぶことの価値に気づかせる『語り』と学習場面での達成感や成就感を実体験させることも、一つの手だてとして効果があったといえるのではないか。

今後は、一人一人が自ら意欲的に学び、個性を生かしながら生きる力をつけていくために、年間を通して継続した指導・支援をしていきたい。また、集団の中で互いに育っていくことのよさを体験させ、その喜びを分かち合い、学びの共同体へとさらに高めていきたい。

《参考文献》

＊宮本美佐子　『やる気の心理学』創元社
＊全国教育研究所連盟　編
『個を生かす教育実践』　ぎょうせい
＊全生研編
『学級集団づくり入門』　明治図書
＊上條晴夫
『ディベートに強くなる本』　学事出版
＊宇留田敬一編集
『特別活動研究』　明治図書